

ソーシャルワークと環境

村 上 信^{*}

ソーシャルワークと環境について、特にこれまで周辺に追いやられて、多くの場合無視されてきた自然環境（物理的環境）に着目して考察を加えた。ソーシャルワークの関心が人々を取り巻く社会環境に集中し、自然環境に十分注意を向けてこなかったことはIFSWの政策文書でも指摘されているところである。2014年のグローバル定義では、諸民族固有の知の再評価ともかかわって、自然的・地理的環境が取りあげられたので、地域定義（リージョナル）と関連させながら、ソーシャルワークと環境について考察した。

キーワード：場所、自然環境、グローバル定義、多様性、包摂性

1. はじめに

2014年7月、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）及び国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）の総会において「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」（以下、グローバル定義）が採択された。グローバル定義に関しては『ソーシャルワーク研究』（41巻2号、3号）が特集を組んでいるが、国際ソーシャルワーカー連盟副会長でアジア太平洋地域会長の木村真理子は、「新定義の採択に強い影響を及ぼした要因はグローバリゼーションである」として、定義改訂の背景、改訂に至る経緯、新定義に示された特徴、IFSWとIFAP（アジア太平洋地域）の役割について論述している。グローバル定義に現れた特徴の一つは、環境の保全や環境の持続可能な発展に対してソーシャルワーク介入の重要性が主張されていることであり、国際関係機関と連携してこれまで以上に社会変革や政治的行動を起こすことの重要性が強調されているとしている（木村 2015：5-15）。

人間と環境の交互作用に注目する考え方は、ソーシャルワークの誕生とともに受け入れられてきた見方であるが、さまざまな理由から、人間と環境への双方への均衡のとれた焦点づけは、

^{*} 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

ソーシャルワークが行われた当初より簡単なことではなかった。ソーシャルワーク実践に従事するソーシャルワーカーは目の前の課題や緊急性に対応することに忙しく、「人間」をどのように捉えるか、「環境」をどのように捉えるか、さらに「交互作用」をどのように捉えるか、などを明らかにする課題は第1の課題から外される傾向にあったことは否定できない。環境の問題は近隣で日頃行われていることであり、平凡すぎて専門職業化にとっては、特別な技能が必要なこととは思われなかったし、環境に関する包括的な理論と関連する支援方法は比較的抽象的で未発達であった。このような背景のもとで、精神力動理論を知識基盤に取り入れた1920年代からは、ソーシャルワーク（当時はソーシャル・ケースワーク）は、「実際の環境への関心から、クライアントによって描き出された環境、援助関係の力動の中で表わされた環境といった比喩的な環境に対する関心へと変化した」（Kemp 1997/2000: 31）のである。こうして、実際の環境の無視が長年にわたって続くこととなった。

「人間」を重視する見方は、ソーシャルワークを必要としている個人に問題や課題の原因を認める傾向にあり、「環境」を重視する見方は、個人を取り込んでいる地域や社会等にその原因を認める傾向にあった。「個人」か「社会」に原因を求める還元主義的で、直線的なソーシャルワークモデルを克服し、個人と社会との両方を対象にすることで、ソーシャルワークの独自性や存在意義を示すとともに、その方法や技術を実践的、理論的に発展させたのは1960年代以降のことである。人間と環境との橋渡しをしたのは生態学理論とシステム理論である。しかしながら、ウェークフィールドが、生態学—システム理論は人と環境の相互依存性や交互作用を優先し、人と環境の間の緊張と相克を詳しく検討することを怠っており、批判的な視点が欠けていると指摘している（Wakefield 1996: 1-32）ことはソーシャルワーカーにとって重要である。ソーシャルワーカーは社会問題である個人問題に取組むことが少なくないが、その介入方法は個人とその人の身近な環境の接点への介入にとどまっており、環境よりは人を中心においている可能性が高いという指摘でもあろう。ザップは、『ソーシャルワークと環境—人と場所の理解』（Zapf 2009）を著し、ソーシャルワークにおける人と環境の相互作用の議論が、人間中心に偏っており、特に自然環境を周辺に追いやってきたと指摘している。2012年に発表されたIFSWの政策文書は、近年、ソーシャルワークの関心は主として、人々を取り巻く社会環境に集中し、自然環境に注意を十分向けていないと指摘している（IFSW 2012）。「人と環境の接点への介入」に焦点化して援助理論を確立したところにソーシャルワークの特色があるとされてきたが、グローバル定義では「人と環境の接点への介入」は定義から削除され、注釈の「実践」の節の冒頭に置かれている。これまでのソーシャルワークの環境への取り組みが人間中心のミクロレベルに、すなわちケンプ（Kemp）が前述したように実際の環境ではなく、比喩的な環境の取り組みにとどまっていたことの証左でもあろう。このような経過を経て、グローバル定義では、環境の持続可能性に対してソーシャルワークの介入の重要性が主張されている。実践についての注釈では、環境には様々な

社会システムのみならず自然的・地理的環境を含んでいることが明記されている。

これまでIFSW/IASSWのソーシャルワークの定義は一つだったが、これからはソーシャルワークの定義を無理に1つに収束させるのではなく、世界定義（グローバル）、地域定義（リージョナル）、国定義（ナショナル）の三層構造の定義をもつことになった。世界定義に反しない範囲でという制約がついているが、各地の実情に合わせて、多様なソーシャルワークの定義があってよいことが明記された。今後、地域や国における独自の定義を策定する動きが活発化することが予想される。

本稿は、ソーシャルワークと環境について、特にこれまで周辺に追いやられて、多くの場合無視されてきた自然環境（人間は自然環境と交互作用を成立させるなかで社会を形成し、文化を育み、歴史を綴ってきた）に着目して考察を加えようとするものである。なお、本稿で用いる「環境」は、後述する小島蓉子がジャーメインの所説を整理して分類した、「人間環境」、「社会環境」、「自然環境」（小島 1992：221-241）に則っている。

2. 自然環境の危機とソーシャルワーク

1950年代半ば以降、世界的に広がった公害反対の声を受けて、1972年にストックホルムで「国連人間環境会議」が開催され、各国で自然環境保護運動が盛んになった。しかし、その後73年、79年と二度にわたる石油ショックで、エネルギーや資源への不安が大きくなって、自然環境問題への関心は遠のいた。80年代になると酸性雨の被害やフロンガスが原因とされるオゾン層の穴、86年のソ連チェルノブイリ原発の事故による放射能汚染や健康被害などがあり、地球環境問題への関心が再び高まった（市川 2008a, 2008b）。1992年に地球サミットと称される「環境と開発に関する国際連合会議」（リオ・デジャネイロ）が開催されている。元アメリカ合衆国副大統領アル・ゴアが、「（地球）環境からの警告は私達の足元に及んでいる」（ゴア 1992/1992：30）として、文明と環境のバランスを求めて、『地球の掟—文明と環境のバランスを求めて』を出版したのは1992年、『不都合な真実』で地球温暖化問題を取りあげたのは2006年である。賛否さまざまな科学的議論を引き起こしながら、アル・ゴアは地球温暖化問題について世界的な啓発活動を展開している。その間、2002年には「持続可能な開発に関する世界首脳会議」（ヨハネスブルグ）が開催されている。

さまざまな環境問題の中でも、地球の温暖化や異常気象の頻度の急上昇など、気候変化が差し迫った明白な環境問題であることは、地球環境問題の存在を否定する人々の中でも、共通した認識ができてきているように見える。しかし、これまでのところソーシャルワークは自然環境上の緊急事態に十分対応しているようには見えない。ザップは、「環境問題が国民の関心事になってきている中、ソーシャルワーカーは人間の安寧と自然環境の継続的存在が深刻な脅威に直面して

いるのに一般に黙っている。なぜだろうか?」「ソーシャルワーカーが取り組む環境は人間環境と社会環境であり、自然環境の問題は、まるで環境保護者が取り組むように残されているかのようだ」と述べ、「人間と自然環境の関係についての新しい理解（パラダイム）に向かって、環境の中の人という従来の隠喩をソーシャルワークが越える時（あるいは、従来の隠喩の時代はとうに終わっている）ではないか」と問題提起している（Zapf 2009：18）。

3. 人間にとっての「環境」の意味

小島蓉子はジャーメインの所説を整理して、人間にとっての「環境」の意味を図1のようにまとめている（小島 1992：221-241）。本稿ではこの分類に則って考察を進めることとする。

①人間環境

ある範囲の人間集団によって社会的かつ歴史的に形成され、個々の人間は其中で生まれ、成長し、生活する。

②社会環境

人工物によって空間的に形象化され、人間関係が展開され、人間関係によって維持され、社会制度（法、習俗、慣習）が規範的に制御している物理的な環境である。

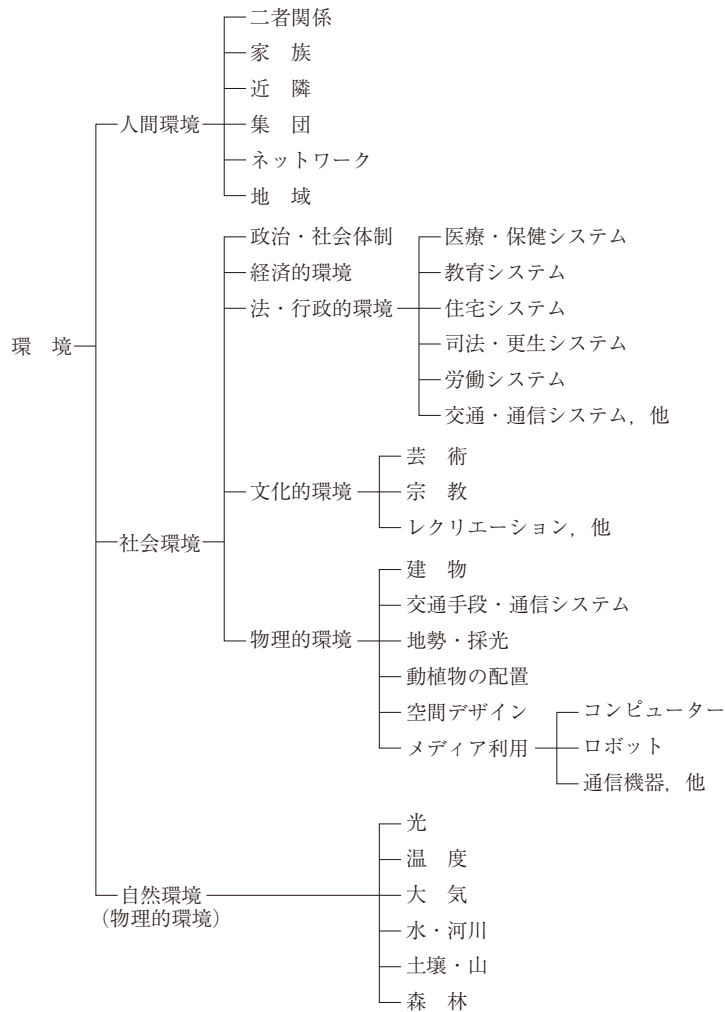
③自然環境（物理的環境）

原植生（人間が影響を与える直前の植生）と里山（手入れ）、里山は原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域である。自然環境は「自然環境」natural environmentと「作られた環境」built environmentの両方を含んでいる。

4. 社会福祉士はソーシャルワーカーか？

1) ソーシャルワーク百科事典における「環境問題」と社会福祉士資格

ターナーが編者となった『カナダソーシャルワーク百科事典』では「環境問題」が独立した項目として掲げられており、天候変化や天然資源の枯渇、環境汚染や生態系問題の衝突などが取りあげられ、環境問題が社会、経済、政治に相互に連結しており、カナダ人の福祉問題であることが記述されている（Turner 2005：122-23）。一方、わが国の『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版（2007）には、環境問題の項目はない。しかし、ここは秋元樹が提起した議論に模して、ソーシャルワーカー＞社会福祉士（国家資格）の不等式を取り上げておかなければならない。秋元は、グローバル定義に関連して、「ソーシャルワークは専門職ソーシャルワーカーの独占物か？」と問題を提起し、世界におけるソーシャルワークの内容は多様であり、ソーシャ



(ジャーメインの所説より小島蓉子氏が構成)

図1 人間にとっての環境の意味

ルワークの地域定義（リージョナル）を策定するならば，ソーシャルワーク＞専門職ソーシャルワークの不等式を受け入れることが必然となることを論述している（秋元 2015：7-8）。社会福祉士資格制度を国家資格として作ったということは，その養成教育の内容も制度によって規定されることである。社会福祉士養成教育の中では，わが国でソーシャルワークの特徴とされることが多かった「人と環境の接点への介入」は，援助関係の力動の中で表わされた環境，すなわちクライアントに身近なミクロの環境（人間環境あるいは社会環境）への介入方法を教育するように制度設計されている。自然環境問題は含まれていないし，その活動も期待されていないということであろう。資格制度を制度論として考えれば，排除性と独自性である。社会福祉士には他を排除

すべき、守るべき独自の分野、例えば業務独占ができるほどに明らかな独自性はないが、ソーシャルワークを志向しているということは、医師や看護師にはない社会福祉士の独自性として挙げることができよう。そのうえで資格制度には「基礎資格」と「専門資格」がある。「基礎資格」は参入規制であり、ミニマム・スタンダードである。これだけはもっていないとこの仕事はできませんよという業界全体の底上げという意味合いが強い。一方、「専門資格」はスペシャリストであり、向上目標である。「専門資格」は、国家資格に委ねるのではなく、基礎資格のうえに学会や業界が専門のレベルを認定して資格を付与することが一般的である。つまり、社会福祉士が実践するソーシャルワークには基礎的レベルから専門レベルまでのグラデーション（段階）があるということである。

2) ソーシャルワーカー＞社会福祉士（国家資格）の不等式

ここでわれわれは「ソーシャルワーカーとは誰か？」という問いに立ち戻ることになる。ソーシャルワークを行うものがソーシャルワーカーである。ソーシャルワークは社会福祉士の独占物ではない。ソーシャルワーカー＞社会福祉士（国家資格）の不等式を受け入れることで社会福祉士はソーシャルワークの機能を社会のさまざまな問題に対して発揮できるようになる。社会福祉士は法が定める基礎資格部分だけに責任をもつのではなく、専門職ソーシャルワークの自律性を発揮できるようになる。自然環境に対する取り組みの道筋も見えてくる。最初に水俣病の発生が確認されたのは1956（昭和31）年であった。水俣病はメチル水銀化合物が自然環境上の食物連鎖によって人間の体内に蓄積されることで起きる中毒性の神経疾患である。新潟県では、1965（昭和40）年に阿賀野川流域で発生が確認されている（塚田 2016）。熊本でも新潟でも、ソーシャルワーカーはまず現れている障害や貧困等の生活困難に対応している。その生活困難がなぜ起きたのかを問うことなく、まず、目の前のニーズに対応しているが、これは原因についてソーシャルワークは関知しないということではない。原因に対して焦点を当てていかない限り、なぜその生活困難が生まれるか、また、どうすれば防ぐことができるのかということを解明していくことができないことはソーシャルワークにとって自明のことである。もし、これについて、仮にソーシャルアクションなど社会変革のためのイニシアティブをとる必要ないという資格制度を国家資格で作ったとすると、水俣病問題に関してソーシャルワークの専門性は発揮できないことになる。日本国内に限ってみても、熊本で水俣病が発生してから9年後に、再び、新潟で水俣病が発生しているのである。水俣病問題は、人と環境との相互作用への多様な介入方法がソーシャルワークに取り入れられる以前の実践例であるが、ソーシャルワーク専門職団体は本事例を風化させない取り組みを継続しているし、学び続けなければならない。

ソーシャルワークには人と環境の両面についての知識と技能に基づく実践を発展させようとする努力を継続してきた歴史がある。それにもかかわらず、ソーシャルワーク実践に従事するソーシャルワーカーは人と環境の両面についての知識と技能を発展させようとする本来の取り組みを

果たす代わりに、人中心の知識と実践に偏る傾向が強かったことは否定できない。次に、人と環境の双方への均衡のとれた実践枠組みを発展させるために苦闘してきたソーシャルワークの歴史を概観する。

5. ソーシャルワークにおける環境理解

1) リッチモンドの環境理解

リッチモンドは1922年に『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』を著して、ケースワークを体系化して「ケースワークの母」と呼ばれた。リッチモンドはケースワークを「人間と社会環境との間を個別に意識的に調整することを通して、パーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」と定義している（Richmond 1922/1991：57-59）。

リッチモンドは、6つの事例に責任をもっているそれぞれのソーシャル・ケース・ワーカーがとった行為と方針について分析して、「洞察」と「行為」との2つの項目に整理した。この2つの項目は、さらに、以下のように、それぞれ2つずつに分類された。

I 「洞察」→「個性の理解」と「環境の理解」

II 「行為」→「心へ働きかける直接的活動」と「心へ働きかける間接的活動」

これを整理して、ケースワーカーのとった行為と方法を4つに分類している。

A 「個人性と人格的特性にたいする洞察」

B 「社会環境における資源と危険性、さらに影響に関する洞察」

C 「心にたいする心による直接作用」

D 「社会環境を通じての間接作用」

BとDは環境に焦点を当てたものである。リッチモンドのいう「環境」とは、「社会環境」のことであり、「自然環境も、社会的な側面をもつ限りにおいて、社会環境の一部をなしている」のである。ソーシャルワークは、先駆者であるメアリー・リッチモンドの時代から人間と環境に関心を払ってきたのである。

2) ハミルトンの環境理解

診断主義学派ケースワークのあり方を提唱したハミルトンは、『ケースワークの理論と実際』を著し、ケースワークを「直接的処置法」と「間接的処置法」に分け、前者を「カウンセリング」と「治療的面接」、後者を「環境の操作」と「具体的サービス」に分類した（Hamilton 1940/1964）。仲村優一は、診断主義学派のケースワークについて、「ケースワークは、クライアントのパーソナリティの構造を、過去から現在におよぶ生育歴・生活歴の分析の中から、明らかにし、さらに現在の生活状況のもとでの自我の機能を解明し、自我の強化を図ることを通して、社会環境に対するパーソナリティの適応力を強めようとするのである（仲村 1980：31）」と解説してい

る。しかしながら、診断主義学派によるケースワークは精神分析学の枠組みを使いながらパーソナリティに重きをおいていくことになり、社会環境に対して働きかける側面は徐々に薄れていく。

1950年代から1960年代にかけてのアメリカでは、失業や貧困問題、犯罪や青少年の非行問題、黒人の公民権運動に象徴される人種差別問題など、さまざまな社会問題が出現し、個人のパーソナリティを対象とする治療的なソーシャルワークではなく、制度や施策の改善に取り組むことを通してクライアントとその生活を支えることを重視する動きが生まれた。ソーシャルワークがソーシャルな側面を取り戻そうとする動きである。個人の支援においても、社会環境との関係のなかで社会生活を営む生活者としての人間理解の視点が重視されるようになる。

3) NASW, ホリス, バートレット, ブトゥリムの環境理解

全米ソーシャルワーカー協会は1958年に「ソーシャルワーク実践の作業定義」を発表し、「ソーシャル・ワークの方法は、(1) 社会環境との関係において、個人の側に変化を促進させる；(2) 社会環境の側に変化を促し、個人にたいして効果的な影響を与える；(3) 個人と社会環境の両者に変化を促し、両者の相互作用を促進させる」と表明している (NASW 1958/1974)。1960年代以降は、ソーシャルワークの対象は個人か社会かといった従来の二元論を克服し、個人と社会の両方を対象とする試みが実践面でも理論面でも試みられるようになる。

ホリスは、『ケースワークー心理社会療法』を著し、人とその人を取り巻く状況、および両者の相互作用という視点から、「状況の中の人 (person in the situation)」に焦点を当てて、クライアントの問題状況をとらえるアプローチを提唱した (Hollis 1964/1966)。バートレットは、『ソーシャルワーク実践の共通基盤』を著し、人間と環境の一元的理解は社会生活機能という概念に集約されるとして、ソーシャルワーク実践を構成する三つの要素としての「価値の体系」、「知識の体系」、「人と環境との相互作用への多様な介入方法」をあげ、これらをソーシャルワーク実践の共通基盤とした (Bartlett 1970/1978)。ブトゥリムは、『ソーシャルワークとは何か』を著し、「生活上の問題に介入するには、人と社会的環境の両方に目を向けなければならない」と指摘している (Butrym 1976/1986)。

4) ジャーメイン, マイヤー, IFSWの環境理解

1980年代に入ると、エコロジカル・ソーシャルワークが台頭し、とりわけ、ジャーメインらによるライフモデルがジェネラリスト・ソーシャルワークの形成に強い影響を与えた。エコロジカル・ソーシャルワークは、生態学を背景として、人と環境が「適応する」ことに焦点を当てた概念であるが、「人と環境との関係性」については、「環境の中の人間 (person in the environment)」と表現されるようになった。ソーシャルワークは、「人」のみに焦点を当てるのではなく、また「環境」の側だけに焦点を当てるでもなく、その交互作用の関係のあり方に焦点を当てるといえるものである。現代ソーシャルワークは「環境の中の人間 (person in the environment)」という図式は、ソーシャルワーク固有の特徴であるということに同意している (Germain 1981)。ソー

シャルワーカーが現実の差し迫った問題に対して行動する際に、解決の方向性を指し示す実践の枠組みが「人間：環境の交互作用」である。「人間：環境の交互作用」は人間から環境への一方的で直接的な作用ではなく、人間：環境の一元的システムの中で絶え間ない相互交換として理解するべきであることを表わしている。マイヤーは、『ソーシャルワーク実践―変動しつつある眺望』を著した（Meyer 1976）。生態学の視座とシステム思考を併せ持つ、ライフモデルの考え方に立って、政策と実践を統合しようとした著作である。マイヤーは生態学のパースペクティブを表現するには従来使われていたハイフン（-）の代わりにコロロン（:）を用いることを提案している。ジャーメインとギッターマンはこの提案に同意して、人間と環境の間の交互作用的な性格を強調するためにコロロン（:）を用い、「人間：環境」を一つの語として捉えることを言明している（Germain & Gitterman 1987/1992 : 488-499）。

2000年に国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）の総会で採択され、以後、2014年6月まで用いられたソーシャルワークの旧定義では、ソーシャルワーカーは、「人々がその環境と相互に影響しあう接点に介入する」としている。

これまでみてきたようにソーシャルワークは、人と環境の双方への均衡のとれた実践枠組みを発展させるために苦闘してきたが自然環境は周辺に追いやられてきたのである。

6. 周辺に追いやられた自然環境をソーシャルワークに組み入れる努力

これまでわれわれは、環境についての広い概念が、全般的に狭い人間環境や社会環境に転換されたこと、すなわち「環境の中の人」が「人間環境／社会環境の中の人」に転換されたことを取りあげてきた。リッチモンドやアダムスらの初期ソーシャルワークでは「環境」が取りあげられたが、1920年代からはソーシャルワークは心理学的、精神分析学的用語で大部分が構成され、「人間」に焦点化することが優勢となり、環境は押しのけられた。現代では「人と環境」のバランスが要請されていることが共有されているが、そうした中にあってもなお、ソーシャルワークは一貫して人間環境や社会環境を重視し、自然環境については、単なる「資源」としか、あまり関心を向けてこなかった。

ザップは、前掲書のなかでソーシャルワークの学術文献や主要なソーシャルワークのテキストを詳細に検討して、自然環境に関する記述の少なさを指摘している。その結果、ソーシャルワークはあたかも都市におけるソーシャルワークが前提とされているかのようであり、地方（田舎）のソーシャルワークとアボリジニの人々を中心とした先住民についてわずかな量の記述があるにすぎなかったと述べている。そして「人と環境の二重の焦点（dual focus on person and environment）」を主張しているにもかかわらず、ソーシャルワークは、人間環境や社会環境を重視し、自然環境については、「社会資源」以外に、あまり関心を向けてこなかったと結論づけて

いる (Zapf 2009)。

一方で、人間と環境のそれぞれについて、一元的にとらえ、アセスメントや介入戦略のなかに自然環境を組み入れる努力がみられるようになってきている。サリーベイは、人間と環境の視点をより一層具体化するために、「身体的心理社会的視点」の必要性、特に身体的要因の重要性を強調している (Saleebey 1992)。グッタイルは、「人と環境」概念の中でも、「自然環境」について、よい実践を行うための基本的要素として位置づけている (Gutheil 1992)。ホフとポラックは、環境の側面を地球的規模にまで拡大して、今日のソーシャルワーク実践について論じている (Hoff & Polack 1993)。

佐藤豊道はチェトコフ・ヤーヌフが1997年に発表した六つの環境を紹介している (佐藤 1999 : 130)。①家族環境、②参加環境、③地域環境、④国家環境、⑤国際環境、⑥宇宙環境という「六つの環境」は深く関わり合いながら、地域変動や生活変化を引き起こし、さまざまな解決を要する問題を生起させ、ソーシャルワークに活動の場を提供しているとしている。

全米ソーシャルワーカー協会 (NASW) は、「環境の持続可能な発展を通して人間と自然環境を保護することは、『環境の中の人間』を完全に実現することになる。環境の持続可能な発展と『環境の中の人間』視座に互換性があることは、マクロレベルの社会福祉実践を人間と自然環境問題に適用する際の安定した理論的な基盤になる」 (NASW 2000 : 105) と主張している。

7. 人間と環境の入れ子状態

ソーシャルワークと環境を考えるに際して、自然環境や地球全体を持ち出すのはあまりにも茫漠としすぎるかもしれない。岡檀が全国でも極めて自殺率の低い「自殺最希少地域 (自殺率の低い地域)」である徳島県旧海部町および隣接する2町を調査するとともに、全国のデータセットを利用して全国を俯瞰し、自殺希少地域と多発地域の地理的特徴を『日本の自殺希少地域における自殺予防因子の研究』にまとめており、ソーシャルワークと環境を考える際に参考となる。すなわち、自殺率を高めたり低めたりするのに最も影響を与えていたのは「可住地傾斜度」であり、ついで「可住地人口密度」「最深積雪量」「日照時間」であった。可住地傾斜度とは、住宅や公共機関など全建物のそれぞれ真下にある土地の傾斜角度のことである。可住地人口密度とは、総面積から森林や湖沼を除いた、文字どおり人が住める土地の面積に基づく人口密度である。自殺希少地域の多くは「傾斜の弱い平坦な土地で、コミュニティが密集しており、気候の温暖な海沿いの地域」であった、と結論づけている (岡檀 2011 : 73-96)。「可住地人口密度」を除くと、自然環境である地理的特性が直接個人に影響していたという研究結果である。これらの自然環境がどのような経路をたどって自殺率に影響を与えているかの間接的影響の分析結果の紹介は省くが、自然環境は生気のない単なる背景ではなく、静的でもないことを証明している。

ジャーメインは、自然環境には複雑で多面的な肌理（きめ）があると主張して、自然環境を静的に捉えることに反対している。そして、彼女は自然環境と社会的環境の相互依存を主張している。そのうえで、このような環境の特質である「複雑さ」が概念化され、明確にされた暁には、「環境」におけるソーシャルワークの実践原理、技能・技術を発展させていくことができるであろう、と述べている（Germain 1981）。

以上みてきたように、ソーシャルワークで自然環境が依然として周辺に追いやられている状況にかわりはないが、環境の視点を自然環境にまで拡大していく試みが行われてきていることに注目しておきたい。人間と環境は「入れ子」状態にある。人間環境と社会環境は、拡大してみれば自然環境と重なっており、究極的には地球全体をひとまとまりとしてグローバルに考えることもできる。その一方で、ローカルな一定の区切りをつけることもできる。さらに、あるローカルな人間環境、社会環境、自然環境の中に、より小さな人間環境、社会環境、自然環境が入れ子状に包み込まれている。

ジェームズ・ラブロックは、地球を一つの巨大生物として描き、そこに巣くう他の生物はこの巨大生物に寄生している微小生物にすぎないと考えて、ギリシャ語で地母神という意味をもつ「ガイア」という言葉を転用して地球を表現した。地球と生物が相互に関係し合いながら環境を作り上げ、地球はあたかもひとつの生命体のように自己調節システムを備えているとみなしたのである（ラブロック 1990：89-105）。こうした生態学の問題では環境に対する責任を1つの独立した学問分野に任せる事はできない。あらゆる学問が生態学の視点で考える、あるいは生態学的に考えて行動することが求められる。

ソーシャルワーク実践では、環境を人間環境、社会環境、自然環境（物理的環境）という三つのレベルでその全体性をつかんだ上で、それら三つのレベルが深く相互に関連しているという事実を確信を持って理解している必要がある。その上で、「人間」と「環境」の交互作用の一元的性格をよく考慮した介入が行われるのである。その時はじめて、人間はその暮らす環境と不離一体の存在であり、ついには「地球的な」（グローバル）環境の中ですべての存在がそこで相互依存しあうとみなされるようになるのである。

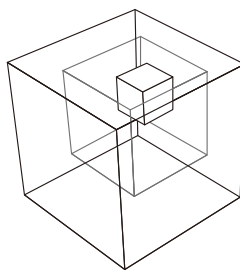


図2 人間と環境の入れ子状態

8. 人間と環境と場所

1) 人間中心主義と環境

絶え間なく報告される自然からの災害や自然環境の危機に直面するさなか、経済発展や技術の進展に打開策を求める考え方がある一方、より根幹に迫り、私たち自身の価値感や生活様式の変更を迫る主張も見受けられる。両者の主張は平行線のままであるように見えたが、2012年にリオデジャネイロで開かれた国連持続可能な開発会議で両者の立場を踏まえた「持続可能な開発」という考え方がでてきた。絶えざる技術革新と経済発展により、「将来みこまれる経済的・社会的便益の可能性を損なうことなく、現在享受できる便益を最適化するような経済の発展の形態」を模索する考え方である。一方で小野幹雄は、「そもそも環境ということは何か中心となるものに対して、それを取り巻く周囲の外界、あるいは背景という意である。そしてその中心とはいうまでもなくヒト、またはその生活であって、地球環境とはそれを地球規模でみるということに他ならない。しかしこの発想自体が極めて人間本位なものである。まず中心にヒトとその生活を置いて、それを取り巻くすべてのものや現象を十把ひとからげに「環境」とよぶのは、人間の傲慢であろう。地球の自然がまず厳然としてあって、その中にヒトもまた一生物として存在を許されているのである（小野 1990：22-23）。」と主張している。全体論的な地球の把握方法であり、人間中心の視点でのエコロジーではなく、生態系がそれ自体で固有の価値を有しているからエコロジー活動を行うのだ、とするディープエコロジーに繋がる主張である。

ソーシャルワークのグローバル定義では、自然環境の保全や将来にわたる「持続可能な発展」がソーシャルワークにとって重要であることが何度も述べられている。木村真理子は、グローバル定義に示された「環境の持続可能性」について、DominelligがGreening social workという言葉を用いて、環境に対する正義、環境を享受する権利の平等性を求めるソーシャルワーク介入などを紹介したうえで、環境の持続可能性を保持する観点から、人間の環境に対する権利を守ろうとする思想が背景にあることを説明している（木村 2015：9）。グローバル定義の背景に、西洋の考え方である人間中心視点の自然環境のとらえ方が存在することを読み取ることができる。

2) ソーシャルワークと「場所」

自然環境はあまりにも地球的（グローバル）なものなので、単純な理論化を試みても、漠然としたものにならざるを得ない。その結果、自然環境は、人間環境や社会環境の背景にすぎず、ソーシャルワーカーの目の前にいる人間の出来事や経過とはほとんど無関係で、静的なものとして周辺に追いやられ、無視されてきた。実際には、自然環境は「場所」ごとに固有の姿を帯びて立ち現れるので、「場所（place）」という概念を用いることを提案しておく。「場所」は人間と自然環境の交互作用を成立させる基盤であり、交互作用が織りなされてきた歴史や文化が蓄積されるところである。場所において住民同士の、また住民と自然環境との具体的な関係が築かれる。

そこでは生活が蓄積され、歴史や文化や価値が創られ、一つの世代から別の世代へと伝え渡される。「場所」は土地と結びついて具体的な皮膚感覚が濃厚である。違う場所には違う時間が流れており、固有の「環境」が成立してゆくのである。「場所」には時間の概念が組み込まれているのでさまざまな大きさを想定できるようになる。小さな場所から宇宙的な巨大な場所までさまざまなスケールの場所を想定することができる。自然環境を農業地域や辺境だけに閉じ込めるのではなく、東京や大阪、京都など大都市も1つの「場所」として、「自然環境」として捉えることが可能となるのである。

「人間—環境」概念に「時間概念 (time)」を組み込んだのはジャーメインである。ジャーメインは、「時間—ソーシャルワーク実践の生態学的な変数」という論文を著し、「ソーシャルワークの歴史において、時間の本質に注意を払った理論家はほとんどいない」と述べ、「生物学的」時間、「心理学的」時間、「文化的」時間、「社会的」時間について考察している (Germain 1976)。ジャーメインは、「空間 (space)」についても論文を書いており、「空間は物理的で心理的な構成物であり、その大きさと質は、環境の知覚に影響を与え、また環境との相互作用に影響を与える (Germain 1978)」と述べている。ソーシャルワークにおける「時間」・「空間」と「場所」はさらに研究の余地がある。真木悠介は、『時間の比較社会学』を著し、文化と社会の形態によって異なる時間の感覚と観念を比較検討し、自然と人間、共同体と年、市場と貨幣等々の関係のなかで、近代的自我に特有の時間意識の形成について興味深い考察を行っている (真木 2007)。加藤周一は、日本の文化における時間と空間について考察し、西洋と東洋の違いをについて論述している。ユダヤ・キリスト教的世界の特徴を「時間は直線上を初めから終わりに向かい、強い方向性を持って、流れる。その方向は変わらず、逆戻りはない。時間線上で起こるすべての出来事は1回限りである。」とし、仏教における時間については輪廻の思想を紹介し、「生死は限りなく繰り返されるから時間を無限の循環とみなすこともできるだろう。しかし、一つの生と次の生とは必ずしも同じではない。輪廻転生は必ずしも同じ出来事の反復ではない。」としている。われわれはこうした関連領域の研究動向と成果から学ぶことも少なくない。

人と自然環境（場所）の関わり方は、その物理的な違いだけではなく、時間的・空間的な要素も加わるので、世界のすべてに共通するものでも、均質なものでもなく、多様な形態・様式を示すのである。したがって、グローバル定義が、ソーシャルワークは特定の実践環境や西洋の諸理論だけでなく、先住民を含めた地域・民族固有の知にも拠っていることを反映した内容となったことは極めて妥当なことである。

ソーシャルワークはヨーロッパで生まれ、北米で育った。今回の定義改正の背景には、ソーシャルワークが自分たちの文化や社会状況にそぐわない面があると考えた非西洋のソーシャルワーカーが増え、その影響力が無視できないものになってきたことがあるとされる (片岡 2015)。これまでIFSW/IASSWのソーシャルワークの定義は一つだったが、これからはソーシャルワー

クの定義を無理に1つに収束させるのではなく、世界定義（グローバル）、地域定義（5つのリージョナル）、国定義（ナショナル）の三層構造の定義をもつことになった。世界定義に反しない範囲でという制約がついているが、各地の実情に合わせて、多様なソーシャルワークの定義があつてよいことが明記された。ヨーロッパと北米の人々の生活と社会の中に生まれ育ったソーシャルワークとは、西洋的な文化・価値観・社会状況に基づいて形成されたソーシャルワークのことであり、非西洋のソーシャルワーカーたちの文化や社会状況にそぐわないのは当然のことである。今後、地域や国における独自の定義を策定する動きが活発化することが予想されるが、ここではローカルな特性を帯びたソーシャルワーク定義の策定が求められているのである。

9. おわりに

ソーシャルワークと環境は、人間環境・社会環境から自然環境への破壊的な負荷として取りあげられることが多かったが、自然環境から人間環境への破壊的な事態が東日本大震災であった。東日本大震災は、自然環境、社会環境、人間環境がそれぞれ脆弱性を抱えていることを明らかにしたが、同時に「環境」には回復力（ゾッリ 2013）があることも明らかにした。自然環境の危機に直面するさなか、もっと高い防潮壁を建設するなど、科学技術の進展に打開を求める動きがあつた一方、より根幹に迫り、私たち自身の価値観や生活様式の変更を要請すべきといった主張もあつた。日本の社会に伏流水のように流れる「共生」の考え方が社会の表面にあらわれ、盛んに議論がなされた。人間と環境はそれぞれが「変数」として考えられるので、それぞれは破壊的であつてはならず、建設的であることが望まれるのである。共生はグローバル定義に取り入れられることはなかったが、自然環境と人間の関係のあり方は西洋社会とわれわれの社会とで差異があつたということであろう。こうした差異を端的に表現するには芸術がわかりやすい。禅僧の鈴木大拙は、芭蕉の俳句とテニスの詩を紹介して西洋と東洋の違いを説明している。（鈴木 1999：5-7）。

芭蕉	よく見れば薺（なずな）花咲く垣根かな
テニス	壁の割れ目に花咲けり
	割れ目より汝を引き抜きて
	われはここに、汝の根ぐるみすべてを
	わが手のうちにぞ持つ
	おお、小さな花よ
	もしわれ、汝のなんたるかを
	根ぐるみ何もかも、一切すべてを

知り得し時こそ

われ神と人とのなんたるかを知らん

テニスンはどこまでも知的に物事をみようとしている。一本の草が死のうが生きようが、そんなことはかまわず、神が創られたこの花を分析し、神の創造の素晴らしさを褒めたたえようとしているかのようなのである。芭蕉はナズナに指一本触れないが、全存在の根底に通貫する神秘を身をもって、自然と一体となって、感得しようとしている。

ソーシャルワークは多様な環境、社会で展開されている。今後、それぞれの地域や国の自然、政治、経済、社会、文化の特性を反映させたソーシャルワークを定義する動きが活発化すると考えられる。しかし、こうした取り組みは容易なことではない。秋元はAPASWEがメルボルンで開催したワークショップで行ったアジア太平洋地域に特有の特徴を取り出す試みを紹介するとともにその困難性について報告している（秋元 2015：12-13）。同時に地域定義（リージョナル）や国定義（ナショナル）はグローバル定義の枠に収まりきれない程に多様なものになることを推測している。

われわれはここで、はじめに紹介した木村真理子の「新定義の採択に強い影響を及ぼした要因はグローバリゼーションである」に戻ることにしよう。グローバリゼーションとは、さまざまな多様なものが、多様なかたちで出会う時代のことである。グローバリゼーションの時代がいかにも、誰もが一人では生きていけない時代であるかということを、世界中に示してくれたのが東日本大震災であった。誰もが一人では生きていけない時代では包摂性が大切である。相異なる思いや心情をいだいた多様な人々が、お互いに相手を度量の広い思いで受け止める包摂性を確保しなければ、多様性を主張するだけの世界は緊張と危険が高まるだけである。多様性と包摂性は同時に実現されなければならないものである。

文 献

- 秋元樹 2015「あなたは世界定義を受け入れられるか？—専門職ソーシャルワークでないソーシャルワークを例に」『ソーシャルワーク研究』相川書房, 41(2), 5-16.
- Bartlett, H.M. 1970, The Common Base of Social Work Practice, National Association of Social Workers.
- 小松源助訳 1978『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房.
- Butrym, Z.T. 1976, The Nature of Social Work, The Macmillan Press. 川田誉音訳 1986『ソーシャルワークとは何か』川島書店.
- Germain, C.B. 1976, Time: An ecological variable in social work practice. Social Casework, Vol.57. No.7, The Family Service Association of America, 419-426. 小島蓉子 1992「時間—ソーシャルワーク実践の生態学的な変数」カレル・ジャーメイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カ

- レル・ジャーメイン名論文集』学苑社, 23-42.
- Germain, C.B. 1978, Space: An ecological variable in social work practice. Social Casework, Vol.59. No.9, The Family Service Association of America, 515-522. 小島蓉子 1992 「空間—ソーシャルワーク実践の生態学的な変数」カレル・ジャーメイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社, 43-65.
- Germain, C.B. & Gitterman, A. 1981, The ecological approach to people-environment transaction. Social Casework, Vol.61. No.6, The Family Service Association of America, 323-331. 小島蓉子 1992 「人間と環境の交互作用」カレル・ジャーメイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社, 101-127.
- Germain, C.B. 1981, The physical environment in social work practice. In A.N. Maluccio ed, Promoting competence in clients: A new/old approach to social work practice, New York: Free Press, 103-124.
- Germain, C.B. 1983, Using physical and social environment.. In A. Rosenblatt & D Waldfogel ed, Handbook of clinical social work, San Francisco: Jossey-Bass, 110-133.
- Germain, C.B. & Gitterman, A. 1987, Ecological perspective. In A.. Minahan (Ed.), Encyclopedia of social work (18th ed.) 488-499. Silver Spring: National Association of Social Workers. 小島蓉子 1992 「治療モデルから生活モデルへ」カレル・ジャーメイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社, 183-220.
- Gore, A. 1992, Earth in the Balance-Ecology and the Human Spirit, Houghton Mifflin Company. 小杉隆訳 1992 『地球の掟』, ダイアモンド社, 30.
- Gutheil, I.A.. 1992, Considering the physical environment: an essential component of good practice, Social Work, vol.37 no.5, September, 391-396.
- Hamilton, Gordon 1940, Theory and Practice of Social Case Work, Columbia Univ. Press. 四宮恭二監修・上巻・三浦賜郎訳 1960, 下巻・仲村優一訳 1964 『ケースワークの理論と実際』有斐閣, 下巻157-213.
- Hoff, M.D. & Polack, R.J. 1993, Social dimensions of the environmental crisis: challenges for the social work, Social Work, vol.38 no.2, March, 204-211.
- Hollis, F. 1964, Casework: A Psychosocial Therapy, Random House Inc. 本出祐之・黒川昭登・森野郁子訳 1966 『ケースワーク：心理社会療法』岩崎学術出版.
- 市川定夫 2008a 『新・環境学—現代の科学技術批判Ⅱ 地球環境／第一次産業／バイオテクノロジー』藤原書店.
- 市川定夫 2008b 『新・環境学—現代の科学技術批判Ⅲ 有害人工化合物／原子力』藤原書店.
- IFSW 2012, Globalisation and the environment
(<http://ifsw.org/policies/globalisation-and-the-environment/>, 2016.5.1)

- 片岡信之 2015「ソーシャルワークのグローバリ定義における新概念と翻訳の問題」『ソーシャルワーク研究』相川書房, 41(2), 58-64.
- 加藤周一 2007『日本の文化における時間と空間』岩波書店, 15-36.
- 木村真理子 2015「グローバリゼーションとソーシャルワーク—ソーシャルワーク専門職：グローバル定義採択と国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) の新たな役割」『ソーシャルワーク研究』相川書房, 41(2), 5-15.
- Kemp, S. P., Whittaker, J.K. & Tracy, E.M 1997, Person-Environment Practice: The Social Ecology of Interpersonal Helping, Aldine de Gruyter, a Division of Walter de Gruyter, Inc. 北島英治訳「ソーシャルワーク実践における環境の概念」横山穰・北島英治・久保美紀・湯浅典人・石河久美子訳 2000『人—環境のソーシャルワーク実践—対人援助の社会生態学』川島書店, 21-50.
- 小島蓉子 1992「実践における生態学とは？」カレル・ジャーマイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーマイン名論文集』学苑社.
- 真木悠介 2007『時間の比較社会学』岩波書店.
- Meyer, C.H. 1976, Social work practice: The Changing Landscape, 2nd ed., New York: Free Press.
- 仲村優一 1980『ケースワーク第2版』誠信書房, 31.
- National Association of Social Workers (NASW), 1958, Working Definition of Social Work Practice. Social Work, Vol.3, No.2, pp.5-8. 松井二郎 1974「アメリカ・ソーシャルワーク理論の最近の動向」『北星論集』11号, 59-60.
- National Association of Social Workers (NASW), 2000, Social Work speaks: NASW policy statements. Washington: NASW Press, 105.
- 岡檀 2011『日本の自殺希少地域における自殺予防因子の研究』慶應義塾大学大学院健康 マネジメント研究科 博士論文, 73-96.
- 小野幹雄 1990「人間中心主義と環境」ラブロック他著, 不破敬一郎, 小野幹雄監修『地球環境用語辞典』東京書籍, 22-23.
- ラブロック, J. 1990「人類とガイア説」89-105. ゴールドスミス編, ラブロック他著, 不破敬一郎, 小野幹雄監修『地球環境用語辞典』東京書籍.
- Richmond, M.E. 1922, What is Social Case Work?, Russell Sage Foundation. 小松源助訳 1991『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』中央法規, 57-59.
- Saleebey, D. 1992, Biology's challenge to social work: embodying the person-in-environment-perspective, Social Work, vol.37 no.2, March, 112-118.
- 佐藤豊道 2001『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究—人間：環境：時間：空間の交互作用』川島書店, 131.
- 鈴木大拙, エーリッヒ・フロム, リチャード・デマルティーノ. 1999『禅と精神分析』東京創

元社, 5-7.

塚田眞弘 2016「記念講演：新潟水俣病被害者として伝えたいこと」日本医療社会福祉協会全国大会.

Turner, F.J. ed. 2005, Encyclopedia of Canadian Social Work, Wilfrid Laurier Univ Press.

Wakefield, J. K. 1996, Dose social work need the eco-systems perspective? PartI: Is the perspective clinically useful? Social Service Review 70, 1-32.

Zapf. M.K. 2009, Social Work and the Environment: Understanding People and Place, Canadian Scholars Press.

ゾッリ, A. 他, 須川綾子訳 2013『レジリエンス 復活力』ダイヤモンド社.

Social Work and the Environment

Makoto MURAKAMI

The perspective of “the person-in-the-environment” has been a popular starting point in social work practice for some time. But social work practice and education have tended to focus more on the personal side of this declared duality at the expense of environmental considerations. The natural environment (physical environment) has been relegated to marginal status or, most often, ignored completely.

This study examined a comprehensive style of social work which places natural environmental issues (physical environmental issues) at the core of social work theory and practice.

Keywords: place, natural environment, global definition of the social work profession, diversity, comprehensiveness